

# 家庭教師の存在意味と作品の持つ曖昧性 —ヘンリー・ジェームズの『ねじの回転』試読—

武藤ハンフリー 恵子

## 1

ヘンリー・ジェームズの『ねじの回転』*The Turn of the Screw* (1895) は幽霊物語として有名であるが、しかしそこに現れるものが本物の幽霊であるのかどうかは、実は曖昧である。そしてこの曖昧性を明確にしようと、長年にわたり多くの批評家たちが様々に解釈を試みてきたのである。

大きく捉えるとこの作品が呼び起こす問題点は、「果たして幽霊は本物であるのかどうか」、もしくは「幽霊を語る女家庭教師は正気なのかどうか」という二点に集約されよう。本作品が発表された当時、これは文字通り幽霊物語として受け止められた。幽霊の脅威に晒される子供たちの姿を見て「これほどに不気味で、理不尽なまでに陰鬱な話は読んだことがない」(Hayes 304) と紙上に評されたように、まさに実在する幽霊の物語として本作品は解釈されたのである。<sup>1</sup> しかし20世紀になり、エドモンド・ウィルソンが幽霊を彼女の精神的抑圧から生み出された幻影であるといういわゆるフロイト的解釈を展開して以降、家庭教師の心理学的分析に焦点をあてて彼女の精神状態を解析しようとする動きが多く見られた。他方で、家庭教師の苦悩する姿に、ジェームズ自身の劇作家としての失敗という精神的苦痛を読み取ろうとするレオン・エデルや、苦悩する家庭教師の姿にジェームズの妹の姿を見ようとするオスカー・カーギルのように伝記的事

実から解釈しようという試みも見られ、さらに近年では少年マイルズと幽霊のクイント、少女フローラと幽霊のジュスル嬢の間などにホモセクシュアルな関係を見出そうとする解釈も見られる。そしてピーター・ベイドラーが様々な批評の流れをまとめた中で指摘するように、「本物か偽物か」「正気か狂気か」を問うのではなく、そのどちらをも考える可能性に近年の解釈は向かっており (Beidler 198)、まさにウェイン・ブースが言うように『ねじの回転』をめぐるには批評的解釈の凄まじいカオスが見られるのである。

そもそも、このような様々な解釈を呼ぶその原因は、先に述べたようにこの作品が持つ曖昧性に起因するのであるが、ジェイズがこの作品を自身が編纂するニューヨーク版に収録する際に付した「序文」を読むと、実はこの曖昧性はジェイズによって仕組まれたものであることが分かる。ジェイズは「序文」でこの作品を自ら解説し、作品を書くのに「重要なことは、絶対的な単一性、明瞭さや完全性を目指しながら、しかし自由に動き回るイマジネーションに、思い切って言えば法外なほど大いに、依存することであった」 (James “Preface” xviii) と説明する。だからこそ彼は、この作品を「想像力が活躍する完璧な例」 (James “Preface” xvii) と呼び、さらにはそれを「純粹で簡潔な精巧さのある小品」と説明して次のように続ける。

... it is a piece of ingenuity pure and simple, of cold artistic calculation, an *amusette* to catch those not easily caught (the “fun” of the capture of the merely witless being ever but small), the jaded, the disillusioned, the fastidious.  
(James “Preface” xviii)

ここでジェイズは、彼が“*amusette*”と呼ぶこの作品を「簡単には引っかからない気難しい人たちを引っ掛けてやる」ことを目的として書いたことを明らかにする。つまり、ジェイズの目的は、読者に様々な解釈を思っ

存分に行わせること、それをこの作品の楽しみとしてその根底に置いてい  
ると考えられる。それゆえ、彼には『ねじの回転』に「幽霊が本物かどう  
か」「家庭教師は正気かどうか」の答えを用意する気は毛頭無く、むしろ  
それを読者が様々に解釈しようと躍起になることこそが、まさに彼が意図  
したものであると言えよう。

ジェイムズは『ねじの回転』を「純粹で単純なおとぎ話“a fairy-tale pure  
and simple”」（James “Preface” xvii）と呼び、その上で「ピーター・クウィン  
トとジェスル嬢は“ghosts”ではなく」（James “Preface” xx）、むしろ「ゴブ  
リンや小妖精、小鬼、悪魔といった昔の魔法使いの類」（James “Preface”  
xx）であると説明する。また、家庭教師については「彼女はこのような奇  
妙な出来事を、十分に信用しうるだけの供述はできている」（James “Pref-  
ace” xix）として、彼女の語ることをそのままに受け止めるよう読者に訴え  
る。結局のところジェイムズによれば、この作品はおとぎ話のようなロマ  
ンスものなのであり、そこにはイマジネーションを豊かに膨らまし得る世  
界が展開している、そして読者は彼が仕組んだこの効果を思う存分に味わ  
えば良い、というわけなのである。これこそが、ジェイムズが「純粹なロ  
マン스에運命をゆだねて」（James “Preface” xx）仕上げ、読者に提供する  
『ねじの回転』である。そして読者は、家庭教師の視点から、彼女が語るこ  
とを聞き、見るものを眺め、彼女とともにページを進めることで、ジェイ  
ムズが提示するロマンスの世界を味わえばいい。

ジェイムズが『ねじの回転』において作り上げる世界とは、当然のこと  
ながら家庭教師によって語られるものであり、読者は彼女の意識に乗って  
彼女の語る世界を眺めることとなる。ここで、彼女が語るものが彼女の人  
生でも半生でもなく、彼女が二十歳の頃にブライ邸に滞在していたごく限  
られた一時期の出来事であることに注目すると、それは彼女の「家庭教師  
の物語」であると言える。つまり、彼女はこの作品の中で自身の家庭教師  
としての奮闘ぶりを語るものであり、それをジェイムズは読者に好きに評価  
させようというのである。

## 2

ジェイムズに名前を与えられることのないこの主人公は、家庭教師として屋敷と二人の兄妹マイルズとフローラの世話することとなる。彼女がやってきたブライ邸は、「貧しい田舎の教会牧師の娘」(152)<sup>2</sup>の目には夢の世界のように映る。「妖精がすんでいそうなロマンティックなお城」(163)のようなブライ邸で、彼女は初めて「空間、空気、自由、夏のあらゆる種類の音楽、そして自然の神秘」(173)を知り、それを謳歌する。そしてこのような世界を彼女にもたらした家庭教師という「素敵なお仕事“My charming work”」(181)に、彼女は至極の幸せを感じ、「子供部屋にあるロマンスや教室での詩」(181)に恍惚とする。ブライ邸には「既に立派な過去となっていたもののロマン主義復興時代の産物“a romantic revival”」(175)があふれており、勿論、このロマンティックな世界の主役である子供たちは「この世で最も美しい子供」(159)であり「天使」(182)たちである。彼女にとってはラドクリフの『ユードゥルフォの怪奇』やシャーロット・ブロンテの『ジェーン・エア』<sup>3</sup>で想像して楽しんだ世界が、まさに目の前に現れ出たかのように思われるのである。そしてこの屋敷の主人、ロンドンに住む“マスター”の存在が、ブライ邸をよりロマンティックな世界へと作り上げてゆく。二度しか会ったことのない彼に密かな憧れを抱く彼女は、自分と“マスター”とのロマンスをブライ邸で思い描いてゆく。この夢の世界に初めて到着して女中頭のグロースさんらに出迎えられたとき、彼女は自分が「まるでここの女主人」(159)であるかのように感じ、また仕事の合間に庭を散歩していたときには「この小径の曲がり角で誰かが突然現れて私に微笑みかけ、私の仕事ぶりを認めてくれないかしら」(176)と考える。「あの方が知ってさえくれれば」(176)と彼女が考えるその人は、勿論“マスター”のことである。<sup>4</sup>まさに『ジェーン・エア』のロマンスをそのままに夢見る彼女の姿がこれらには見られるのであり、ブライ邸というロマンティックな世界で、彼女は自分に起こるかも知れな

い“マスター”との結婚というロマンスを期待し、訪れるかもしれない甘く幸せな未来に心を奪われるのである。

しかし彼女は、自分が家庭教師であるからこそこのようなロマンスが可能となるということを十分に認識している。だからこそ、彼女は“マスター”に「知ってもらいたい」と思うのである。家庭教師という仕事が、彼女をブライ邸に滞在させるのであり、そして彼女の“マスター”とのロマンスを可能とする。主人不在のブライ邸で女主人然として振る舞えるのは彼女が家庭教師であるからであり、そもそも家庭教師という仕事があったからこそブライ邸という夢の世界に彼女は足を踏み入れることができたのである。つまり、「家庭教師」であることが、ブライ邸のみならず“マスター”に対しても彼女の存在を意味付けるのである。

このように考えたとき、彼女が直面することとなる二つの問題は家庭教師としての彼女の立場を危険にさらすものとなる。それはマイルズの放校問題とブライ邸に現れる幽霊の存在であり、これらを解明することは、家庭教師としての彼女の資質が問われる問題である。しかし言い換えるとそれは、彼女のブライ邸での存在価値を高めるチャンスとも考えられよう。だからこそ、子供たちを幽霊から守らなくてはならないと考えたとき、彼女は自分に与えられた役目にヒロイズムを感じるのである。

I was in these days literally able to find a joy in the extraordinary flight of heroism the occasion demanded of me. I now saw that I had been asked for a service admirable and difficult; and there would be a greatness in letting it be seen --- oh in the right quarter! --- that I could succeed where many another girl might have failed. [...] I was there to protect and defend the little creatures in the world the most bereaved and the most loveable, [...]; we were united in our danger. They had nothing but me, and I ---well, I had *them*. It was in short a magnificent chance. (198-9)

子供たち“the little creatures”を幽霊から守るという役目が家庭教師という仕事に加わった時、その仕事は彼女にとって付加価値が加わったこととなる。「他の女の子だったらできないようなこと」をうまくやって「立派な姿“greatness”」を見せ、「この子供たちには私しかいない」のだと他者に示すことは、彼女に「大きなチャンス“a magnificent chance”」をもたらすと彼女は考える。これはつまり、彼女が自分の存在価値をブライ邸に知らしめるチャンスなのであり、また“マスター”に見せつけるチャンスでもあるのである。こうして、幽霊の存在は、彼女の家庭教師としての立場を脅かすものである一方で、それと同時に彼女の価値を高めるチャンスともなるのである。

### 3

ジェイムズが「不吉な悪“Portentous evil”」（James “Preface” xx）と呼ぶクウイントとジェスル嬢の存在は、実はマイルズの放校問題と強く関係しているように思われる。放校処分を知らせる手紙を受けた後に初めてマイルズに会った家庭教師は、その「信じがたいほどに美しい“incredibly beautiful”」(171) 姿に心を奪われ、この悪い知らせは何かの間違いであろうと考えてグロース夫人と次のような会話を交わす。

“... What will you say then?” she [Mrs. Grose] immediately added.

“In answer to the letter?” I had made up my mind. “Nothing at all.”

“And to his uncle?”

I was incisive. “Nothing at all.”

“And to the boy himself?”

I was wonderful. “Nothing at all.” (172)

ここで彼女は、美しい天使のようなマイルズに邪悪な要素などあるはずが

ないとの思いから、放校問題を取り合わないことにする。しかしマイルズに理由を聞くこともなくただその美しい姿を理由に放校処分を間違いだと結論づける彼女の判断は、確たる根拠もないだけに現実からの逃避としか思われぬ。それにもかかわらず、彼女がここで用いる“incisive”“wonderful”には自己を讃美する様がうかがえ、彼女が自分で下した結論に陶醉する姿を見ることが出来る。根拠のない判断に舞い上がる彼女の姿は、逆に彼女が自分の判断に絶対的な自信を持つほど滑稽なものに映ることとなる。このため彼女が子供たちを信じるというその言葉自体が表層的なものに読者には聞こえるのであり、結果、彼女が言葉どおりには子供たちを信じてはいないのではないかと思わせる。実際、眼前の純粋で美しいマイルズが持つ、天使のように美しい子供と学校から処分を受けた子供という相反する姿が、家庭教師を混乱させ後者からの逃避を決意させるものの、それでもやはりマイルズの放校問題に彼女は悩み続け、それが幽霊の出現と相俟って彼女を苦しめてゆくことになるのである。

先に挙げた会話が交わされて数日後、しかもまだ同じ章であるうちに、彼女はクウイントに初めて遭遇する（176）。クウイントたちの出現は、彼女の放校問題解決への心理的重圧と比例しているように思われる。この問題は放っておこうと言い放った彼女の自信は、しかし彼女をこの問題から解放するわけではない。「良い」家庭教師として子供たちを完全に理解し教育しなくてはならない彼女にとって、この問題はその彼女の立場を危うくする問題である。結局打ち消すことのできない彼女の不安は、彼女が幽霊との遭遇を重ねるにつれ、子供たちが幽霊たちとの関係を隠しているのではないかという懐疑心となって表面化するのである。そして彼女がジェスル嬢に遭遇した時のフローラの様子から“*They [Miles and Flora] know — it's too monstrous: they know, they know!*”（203）と子供たちが幽霊の存在を知っていながら彼女から隠していると感じたとき、この疑念は確信へと形をかえることになる。子供たちがクウイントたちのことを彼女から隠している以上、彼女は子供たちを完全に把握しているとは言えず、結果幽霊の

存在は家庭教師としての彼女の立場を脅かすものとなる。だからこそ彼女は、ブライ邸での自分の立場を守るためにも幽霊の問題を解決する必要に迫られるのである。

彼女が目を背け続けたマイルズの放校問題は、ついに彼が学校に行きたいと家庭教師に言ったときに逃れられないものとなる。ある日曜日の朝、教会に向かう道でマイルズは家庭教師に「一体いつになったら僕は学校に戻れるの? “when in the world, please, am I going back to school?”」(249)と突然尋ねる。彼は「もっといろいろな生き方 “more life” がみたい」、「自分と同じ仲間 “my own sort” が欲しい」(251)と言い、ブライ邸では得られないものを求めるのである。しかしこれに明確な返事を出さない家庭教師に、彼は次のように続ける。

... he presently produced something that made me drop straight down on the stone slab as if suddenly to rest. “Does my uncle think what you think?”

I markedly rested. “How so you know what I think?”

“Ah well, of course I don’t; for it strikes me you never tell me. But I mean does *he* know?”

“Know what, Miles?”

“Why, the way I’m going on.”

I recognised quickly enough that I could make, to this enquiry, no answer that would n’t involve something of a sacrifice of my employer. [...] “I don’t think your uncle much cares.”

Miles, on this, stood looking at me. “Then don’t you think he can be made to?”

“In what way?”

“Why by his coming down.”

“But who’ll get him to come down?”

“I will!” the boy said with extraordinary brightness and emphasis. (252-3)



学校問題を解決しようとしないう家庭教師にマイルズが“マスター”の存在を口にしたとき、ブライ邸での彼女の家庭教師としての立場が危機に直面したと言える。しかも、マイルズが“マスター”に連絡を取るということは、彼女の家庭教師としての働きに失格という評価を下されることに他ならない。こうして学校問題で彼女が追いつめられたとき、この直後に飛び込んだ勉強部屋で彼女の机に座り涙を流すジェスル嬢の幽霊に遭遇する。<sup>5</sup>結果として、マイルズの学校問題が逃げられないものとなったとき、彼女はついに幽霊と「対決」することを決意せざるを得なくなるのである。

#### 4

これらの問題の解決には、子供たちからの「告白」が要であると彼女は考える。幽霊の存在を認めようとしないう子供たちが「良い子」であるためには彼らが素直に幽霊の存在を「告白する必要性 “the need of confession”」(292)があるのであり、決して放校の理由を口にしないマイルズが彼女に「素直」であるためには、それを「告白」する必要があると彼女は考えるのである。「マイルズが告白してくれれば、あの子は救われる」(292)と彼女は考えるが、実はこれは彼女自身の存在価値を守ろうとする行為に他ならない。子供たちの「告白」とは、彼らが家庭教師に「従順」であることの証であり、彼女の家庭教師としての資質が認められる結果をもたらしまうものなのである。

そもそも、子供たちの「沈黙」は彼女への「不従順」を示すものである。これは幽霊たちの登場にも象徴的に表されている。彼女が初めてクウイントを塔の上に見つけたとき、その状況は次のようである。

The rooks stopped cawing in the golden sky and the friendly hour lost for the unspeakable minute all the voice. But there was no other change in nature, unless indeed it were a change that I saw with a stranger sharpness. (176)

彼女がクウイントを見た瞬間、「カラスが鳴きやむ」だけでなく「すべての音」がかき消される。それ以外には何の変化も見られないものの、ただ音だけが失われて、彼女は静けさに包まれるのである。つまり、彼女の存在価値を脅かすものの象徴である幽霊は「無音」を伴って現れる。また、彼女がジェスル嬢と初めて遭遇したときの場面も興味深い。ジェスル嬢の姿に思わず息を呑んだ家庭教師は、フローラからも同様の反応を得ようと息を殺してその様子をうかがう。

I held my breath while I waited for what a cry from her, what some sudden innocent sign either of interest or of alarm, would tell me. I waited, but nothing came; [...] I was determined by a sense that within a minute all spontaneous sounds from her had dropped. (202)

ここで彼女はフローラから子供らしい「叫び声“a cry”」が聞かれることを期待するが、実際に彼女がフローラから得たものは「何も無い“nothing”」のであり、むしろ、このとき彼女はフローラから聞こえるはずの「あらゆる音が消えた」のを感じている。つまり、このときもまた、幽霊は「無音」を彼女にもたらし、そしてさらに子供たちの「沈黙」とあいまって彼女を静けさの中に包み込むのである。

彼女の幽霊と対峙する決意は、彼女がこの「静けさ」に立ち向かうことをも意味する。だからこそ彼女は沈黙を打ち破るものとして、子供たちからの「告白」が必要となるのである。彼女がマイルズとの最後の会話の中で「もしこの子が無実だというのなら、一体私は何だというのか？」(119) と言うように、マイルズたちの「告白」は、彼女のプライドでの存在価値のみならずそこでの自己の存在を確認し自分の居場所を確保するために必要不可欠なものである。いわばそれは、彼女が構築したロマンスの世界を保持するために必須のものなのである。

ここで、『ねじの回転』がそもそも家庭教師の過去の「告白」という形を

とっていることに注目したとき、彼女の「告白」もまたその自己の存在を確認するものであることが分かる。彼女はブライ邸での体験を手紙で「告白」するという形で自分の存在を顕現化し、彼女の行為を有意味なものとする。そして過去の体験を「語る」ことが彼女の存在をダグラスという第三者に認識せしめ、それがまたダグラスによって更なる第三者に知らされてゆく。結果として家庭教師の「告白」は、自己の存在を他者に知らしめるものとなり、ジェイムズが名前を与えなかった彼女の存在はここに確立されることとなる。

ジェイムズは、『ねじの回転』が書かれた時期に、空想の世界の中に自分の居場所を見出そうとする主人公を度々描いている。『メイジーの知ったこと』（1897）では、少女メイジーが義父との生活が可能となることを夢見てそこに自分の居場所を得ようとし、また「檻の中」（1898）では、家庭教師同様ジェイムズに名前を与えられていない電報係が、郵便局に現れるエヴェラードとの架空のロマンス話を想像し、そこに自分の居場所を見出そうとする。家庭教師のように彼女らが自分の口で語ることは無いのだが、しかし作品が彼女らの視点で書かれている以上、読者は彼女らの心の声を聞くこととなる。レオン・エデルは、この時期のジェイムズが女性を主人公とした作品を書き続ける中で劇作での失敗という痛手から立ち直ろうとした心理的治癒の過程が見られると言うが、<sup>6</sup> ジェイムズの主人公たちが「空想のロマンス」の中に自分の居場所を求めるという行為には、むしろ現実からの逃避をも見ることができる。「告白」や「語り」という行為によって、自己の存在意義を確認し居場所を見出そうとするものの、しかしこの行為が空想の世界で行われている以上、現実を目の前に突きつけられたとき彼女らの存在意義は失われてしまう。電報係が、エヴェラードとの関係の変化によって彼女の空想の世界に現実が混じり合い始めたとき、それは崩壊し彼女に対する彼女の存在価値は失われてしまったように、家庭教師もまた「告白」をマイルズたちに求めたとき、彼女の存在価値は彼女の思惑とは逆に失われてしまうのである。

マイルズとフローラに、一度もその名を出したことの無いクイントとジェスル嬢の名を出すということは、家庭教師が思考の中だけにとどめてきたものを現実化することに他ならない。湖で家庭教師がフローラにジェスル嬢の存在を認めさせようとしたとき、彼女がジェスルの名を口にした瞬間、フローラの様子は一変する。

Flora continued to fix me with her small mask of disaffection, and even at that minute I prayed God to forgive me for seeming to see that, as she stood there holding tight to our friend's [Mrs. Grose's] dress, her incomparable childish beauty had suddenly failed, had quite vanished. I've said it already — she was literally, she was hideously hard; she had turned common and almost ugly. (281)

たとえようも無いほどに美しかったはずのフローラの顔は、「平凡で醜い」ものへと変化する。少女の顔にはただ家庭教師への「反発心」があるのみで、そこには家庭教師が求めている告白による従順さは見られない。むしろ、家庭教師が幽霊の名を現実のものとして口に出したとき、彼女がブライ邸で手に入れたはずの世界は崩れ始めるのである。天使のように愛らしかったフローラの顔は醜いものになり、この後少女は家庭教師のもとから離れるためブライ邸を去ってゆくこととなる。こうしてジェスルの名の現出は、彼女のロマンスの世界を崩壊させ、彼女の存在価値を否定される結果を生むのである。

また、家庭教師がマイルズに告白を求めたとき、彼がクイントの名を口に出した瞬間に彼女とマイルズとの関係も終わりを迎える。マイルズが「最後の降伏の印としてのクイントの名前“his supreme surrender of the name [Quint]”」を口に出し「私の彼への献身に対する感謝の印“his tribute to my devotion”」(309)を示してくれたと家庭教師は理解するが、その直後にマイルズの小さな心臓はその動きを止め彼女の腕の中にその体を横たえ

るのみとなったのを見たとき、彼女は自分の行為が否定されたのを思い知ることとなる。このときもまた、クウィントの存在が彼女とマイルズの間に現実のものとして介入したとき、彼女が夢見てきた世界は終焉を迎えたと言えよう。当然のことながら、マイルズの死は彼女の家庭教師としての仕事の終了を意味し、それはブライ邸での日々の終了をも意味する。彼女の存在価値を高めると信じていた「告白」は、逆にそれを否定するものとなり、マイルズの死と共に彼女の居場所は消滅するのである。

## 5

ジェイズが、子供たちの告白が彼らを救うとする家庭教師の信念を否定したとき、我々読者もまた彼女の「語り」への信頼を覆されてしまうこととなる。告白が子供たちを救うのではなかったのか、彼女が夢見たロマンスの世界は単なる夢物語に過ぎなかったのか、彼女の子供たちへの献身的な努力は本物であったのか、そして彼女が主張する幽霊の存在は真であったのか、そしてそもそも彼女が語るブライ邸での体験自体が事実なのか。ジェイズはこうして、家庭教師の語る物語の世界から読者を突き放すのである。

この「告白」の信頼性の喪失は、『ねじの回転』の基本的構造を揺るがすものとなる。家庭教師がブライ邸での出来事を「告白」した手紙を、それを譲り受けたダグラスが数年後に友人らに「語る」話が、その手紙をさらに譲り受けた「私」によって「語られる」という枠組みは、「語り」の信頼性の喪失と相俟って読者の目を曇らせてゆく。信頼性にかけるジェイズの人物たちの、幾重にも重ねられたその語りの向こうに家庭教師は存在するのであっては、家庭教師から時間的にも距離的にもかなり隔てられたところから彼女の話聞いていた読者は結局、真実が見えないままに取り残されることになる。

ジェイズは本作品を「語る」行為を基盤として構築しながら、作品の

中で「語り」の信頼性の欠如を示す。そして、ジェームズは「序文」で家庭教師の「十分に信用しうるだけの供述」を保証し彼女の語ることを読者に好きに評価させると言いながら、しかし彼は最後になって、読者が家庭教師から聞いてきたことすべての信憑性を否定する。結局、読者はジェームズの言葉を信じて彼女の語るロマンスを楽しんだものの、最後になってそのジェームズに裏切られることになるのである。それはあたかも、作者ジェームズの語ることにすら信頼性を疑うべきものであると彼が嘲笑いながら伝えているかのようである。最後に信頼を覆された読者は、結局曖昧な理解のままに作品から解放され、不安定なまま放り出されることになる。家庭教師を理解しようとしたものの、結局『ねじの回転』が持つ「曖昧性」に甘んじざるを得ないのであり、ジェームズが仕組んだこの「曖昧性」に「序文」での予告通りに見事「引っ掛かった」ことを知り、彼の手法に感服しつつも、ほくそ笑むジェームズの姿を目に浮かべて苦虫を食む思いをしながら作品を読み終えるしかないのである。

## 注

- 1 19世紀末は幽霊の存在の有無が大きく議論された時代であった。ケンブリッジ大学を初めとして心霊学の研究が盛んに行われており、イギリスのみならずアメリカでも幽霊の存在は疑われること無く一般市民にも広く受け入れられていたのである。ジェームズの兄ウィリアムが心霊学研究会の熱心な会員であったことは有名であるが、ジェームズは兄の代理として研究会の会合で発言をしたことがある。ジェームズは、幽霊に対する人々の反応を十分に理解したうえで、あえてそのような社会に『ねじの回転』を発表したのである。
- 2 本論で使用するテキストはすべて Henry James. *The Turn of the Screw. The Novels and Tales of Henry James*. Vols.12. New York: Charles Scribner's Sons, 1908. Fairfield, New Jersey: Augustus M Kelley, 1979 から引用し、そのページ数は括弧内に記すものとする。
- 3 家庭教師が初めて幽霊のクイントに遭遇した時、彼が塔の上に姿を現し

たことから、ブライ邸には塔に幽閉された人がいるのではないかと彼女は考える。“Was there a ‘secret’ at Bly — a mystery of Udolpho or an insane, an unmentionable relative kept in unsuspected confinement?”(179) タンプリングは作中での様々な出来事の時間をつなぎ合わせ、そこに明言されてはいないものの、家庭教師が *Jane Eyre* を読んでいたという設定が成り立つと立証する。(Tambling 103)

- 4 家庭教師がこの仕事を引き受けたとき、彼女は“マスター”から「一切彼を煩わせるな、訴えかけたり苦情を言ったり手紙を書いてよこしたりするな “she should never trouble him — but never, never: neither appeal nor complain nor write about anything”」(156) という条件を出されている。彼女が彼の要求通りに働けば働くほど、実は彼がその仕事ぶりを見て欲しいと思う彼女の望みは皮肉にも実現から遠ざかってゆくのである。
- 5 この場面は多くの批評家によって様々な分析される。ここに「ゴシック・メロドラマの縮図 “The very epitome of Gothic Melodrama”」(Lukacher 125) を見るルカチャーは、家庭教師とジェスル嬢の関係の双価性、自己と他が持つ両面価値を指摘する。他にマーサ・バンタのように、ジェスル嬢が「象徴的に彼女自身」を表している (Banta 124) と解釈する批評家は多い。
- 6 Leon Edel は1896年から1899年にかけて出版された主な作品に注目し、その女主人公たちに徐々に成長してゆく連続性があることを指摘する。劇作家としての失敗の痛手から立ち直るために、ジェイムズが幼少期から青年期までの成長を無意識のうちにたどり直そうとした本能的な反応が見られると彼は解説するのである。(Edel 480)

## 引用文献

- Banta, Martha. *Henry James and the Occult*. Bloomington: Indiana UP, 1972.
- Beilder, Peter G., ed. *The Turn of the Screw*. By Henry James. 2<sup>nd</sup> ed. New York: Bedford St. Martin's, 2004.
- Booth, Wayne C. *Critical Understanding: The Powers and Limits of Pluralism*. Chicago: U of Chicago P, 1979.
- Cargill, Oscar. “*The Turn of the Screw* and Alice James.” *PMLA* 78 (1963): 238–49.
- Edel, Leon. *Henry James: A Life*. New York: Harper & Row, 1977.

- Hayes, Kevin J., ed. *Henry James: the Contemporary Reviews*. Cambridge: Cambridge UP, 1996.
- James, Henry. "In the Cage." *The Novels and Tales of Henry James*. Vol.11. New York: Charles Scribner's Sons, 1908. Fairfield, New Jersey: Augustus M Kelley, 1979.
- . "Preface." *The Novels and Tales of Henry James*. Vols.12. New York: Charles Scribner's Sons, 1908. Fairfield, New Jersey: Augustus M Kelley, 1979.
- . *The Turn of the Screw*. *The Novels and Tales of Henry James*. Vols.12. New York: Charles Scribner's Sons, 1908. Fairfield, New Jersey: Augustus M Kelley, 1979.
- . *What Maisie Knew*. *The Novels and Tales of Henry James*. Vols.11. New York: Charles Scribner's Sons, 1908. Fairfield, New Jersey: Augustus M Kelley, 1979.
- Lukacher, Ned. " 'Hanging Fire': The Primal Scene of *The Turn of the Screw*." *Henry James's Daisy Miller, The Turn of the Screw, and Other Tales*, Ed. Harold Bloom. New York: Chelsea House, 1987.
- Tambling, Jeremy. *Critical Issues: Henry James*. London: McMillan, 2000.
- Wilson, Edmund. "The Ambiguity of Henry James." *Hound and Horn* 7 (1934): 385–406.